ひと 最前線

国際交流は自分を知り 相手を認めることが大切

アイエス通訳システムズ 代表取締役

山崎 美智子さん
Michiko Yamasaki

「英語が上達したければ、部屋で一人でいる時などに自分から英語を話してみることです。新聞などを見る時に興味がある記事は目に飛び込んでくるのと同じで、自分から発していれば自然と聞こえるようになるんです」と語るのは鹿児島で唯一の通訳会社を経営する山崎美智子さん。

鹿児島大学の教育学部を卒業後、アメリカのインディアナ大学院に留学。帰国後、外国人を案内している時に「西郷は自決した人なのになぜ英雄なのか」という質問に答えられなかったことへの悔しさから「通訳案内士」の国家資格を取得した。

その後、個人で通訳ガイドとして活動していたが、昭和63年に鹿児島で開かれた国際火山会議に携わったことをきっかけに通訳会社を設立した。

これまでにスペースシャトル「エンデバー」の乗組員が来鹿したときや世界自然遺産会議など、多くの重要な国際会議等に通訳として携わり、また後進育成のために、仙巌園や桜島などの地域の観光資源を利用した通訳ガイドの講座も開設している。

「好きな言葉は『Could be better（より、上をめざして）』。とにかく天井を造りたくない。できないといい訳を言うのではなく、他の可能性を探りたい」と常に前向きな姿勢で挑む山崎さんに通訳の楽しさや国際交流について語ってもらった。

「泣こよかひっ飛べ」の精神で

いつ頃から英語に興味を

中学生の時に出会った「サウンド・オブ・ミュージック」という映画がとても気に入って、自分の小遣いで初めてLPを買ったんです。そのLPがとても貴重で愛おしくて、歌詞を全部辞書で調べたんです。その中で出てきた「I'll do better than my best（最善よりも、さらなる努力をする）」という文章に興味を持ちました。最上級の前に比較級があって、学校で習う文法どおりではないけれどもすごく気持ちが伝わり、心を打たれました。それが英語に興味を持つきっかけとなりました。

なぜ鹿児島で通訳を

昭和54年に県の事業で香港鹿児島交流会議懇談会があって、そこで初めて会議通訳をさせてもらったんです。その時に東京から来たベテランの方と一緒に組ませていただいたんですが、まともな訓練を受けたこともない私とは経験や表現力に歴然とした開きがありました。それでその方に「やはり東京の学校に行って勉強しないとまともな通訳はできないみたいですね」という話しをしたら、その方が「東京には学校はあるけどそれはシミュレーションの世界だ。でもここ鹿児島には本番の世界がある。機会は少なくても本番を経験できる方がいいのかもしれない」と言われたんです。それを聞いてその気になってしまって、鹿児島で一年に一回でもいいからこんな機会を楽しもうと思ったんです。

スペースシャトル「エンデバー」の乗組員が来鹿したときに桜島を案内。右手前背中が山崎さん。

その後は順調に

訓練方法さえどうすればいいか分からないわけですから、手探りというかほとんど直感でやってきた感じで、かなり時間もかかったし苦労も多かったですね。50%の自信があればどんな仕事でも挑戦しようとは思っていたのですが、初めて同時通訳業務をしてほしいと依頼があったときは、さすがにやったことが無いことなので、自信や成功の確率も50%を完全に下回ると思い、県外の業者に頼んで欲しいと断ったんです。でも、鹿児島の力でやるから意味があるんだと説得されて。結局ほとんど経験も知識も無いまま通訳の人数を増やすなど自分たちなりに工夫してやりました。今考えるとかなり無謀なことをしてきたと思うけど、逆にそれが鹿児島の良いところでもあると思います。とにかくやるしかないという思い、まさしく「泣こよかひっ飛べ」の精神です。

通訳の楽しさはどんなところに

色々ありますが、通訳案内の楽しさは自分が知らない日本に気づかせてもらえることですね。外国の方は私たちが思ってもみない視点から質問されることがあります。例えば、「明治維新はなぜ革命(revolution)と言わないで維新(restoration)なのか」とか「知覧の特攻隊員は本当に喜んで自ら進んで身をささげたのですか」など。私たちが歴史の授業で普通に習ってきたこと以上のことを聞かれ、答えに窮してしまうこともあります。日本人として良識のある回答を求められるので、この業務が国家資格であることもうなずけます。

一方で、会議通訳の醍醐味は、黒子ではあるものの、第一線の情報に触れられることです。今までも日本のプロゴルファーのためのセミナーや、競技大会、会議など、さまざまな場面でいろいろな情報に触れることができました。自分自身を高めるには最高のエネルギー源だと思います。かなり緊張もしますが、スピードとスリルの魅力にやみつきになるんです。

鹿児島の国際化について感じることは

「マリンポートかごしま」ができてから多くの海外観光船が鹿児島にも入港しています。観光客は鹿児島市内、桜島、指宿と県内の観光に出かけますが案内をする通訳案内士（ガイド）はほとんど県外の人。ぜひ鹿児島の通訳案内士の数をもっともっと増やしたいと願っています。また、会議通訳などの技術を身につけた人の組織化も考えています。今年は会社設立20周年の記念すべき年なので、今年中にはこれをぜひ実施したいです。

それから今は色々な場所で様々な国際交流が行われていますが、交流をもっと深めたいのであれば、自分自身のことを知ることが大事だと思うのです。相手に自分の国のことをしっかりと説明できなければ本当の交流はできません。ただ英語がしゃべれるというだけではダメなんです。まずは自分が住む日本のこと、鹿児島のことをしっかりと理解し、それを相手に伝えることができること。その上で相手を認めるという基本的なことが大切だと思います。

仙巌園での通訳ガイドコース講義風景。